

春 秋

「夏なのにコートを着た女性を乗せ
目的地に着いたが、後ろの座席には誰
もいなかった」。東北学院大学の学生
が、震災後に約1年かけ宮城県石巻市
のタクシー運転手200人に聞き取り
して、まとめた論文が話題になってい
る。こんな幽霊現象の体験者が7人もいた。

▼先日、仙台市内で緊急のシンポジウムも開か
れ、150人が参加したと地元紙が報じる。運
転手らは幽霊に恐怖ではなく畏敬の念を持って
いるようだった、とは論文の筆者の弁だ。地元
への愛着、突然亡くなった人々への深い共感、
そんな心性が不思議な体験に反映しているの
は、と見立てる。どこか納得できる分析だ。

▼怪異譚の収集では大先達の柳田国男「遠野物
語」にも、明治期の三陸大津波で妻を失った福
二という男が幽霊に会う話がある。夜、霧のな
ぎさから亡妻とある男が近寄ってきた。男の方
は妻が福二と結婚する前に深く心を通わせてい
たとされる人物である。妻は「今はこの人と夫
婦になっている」と静かに言い立ち去った。

▼津波後の現実を認めたくなかった福二も、亡
妻に今の境遇を聞けば、喪失を受け入れるしか
ない。それは再起の足場でもある。「震災から
の復興に挑む人の一方、前を向ききれない人も
いる」と論文の筆者は言う。未曾有の災害から
5年、人はどう乗り越えるのか。幽霊との遭遇
談は悲しみを秘めつつ、貴重な示唆に富む。